司馬遼太郎全集 32

評論随筆集

司馬遼太郎全集　第三十二巻
第三十二回配本　評論随筆集
定価　一八〇〇円

昭和四十九年四月三十日第一刷
昭和五十六年十二月一日第五刷

著者　司馬遼太郎
発行者　杉村友一
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(代表)〇三―二六五―一二一一

印刷所　大日本印刷
製本所　大口製本
製函所　トーシキ

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© RYOTARO SHIBA　Printed in Japan

評論随筆集

司馬遼太郎全集 32

司馬遼太郎全集 第三十二巻

評論随筆集 5
全集の校正を終えて 495
年譜 499
司馬遼太郎の世界 尾崎秀樹 545

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

装幀　三井永一
題字　中田　功
AD　粟屋　充
地図　高野橋康

評論隨筆集

歴史を紀行する 13

竜馬と酒と黒潮と〔高知〕15
会津人の維新の傷あと〔会津若松〕27
近江商人を創った血の秘密〔滋賀〕38
体制の中の反骨精神〔佐賀〕49
加賀百万石の長いねむり〔金沢〕61
〝好いても惚れぬ〟権力の貸座敷〔京都〕71
独立王国薩摩の外交感覚〔鹿児島〕82
桃太郎の末裔たちの国〔岡山〕92
郷土閥を作らぬ南部気質〔盛岡〕103
忘れられた徳川家のふるさと〔三河〕114
維新の起爆力・長州の遺恨〔萩〕124
政権を亡ぼす宿命の都〔大阪〕135
あとがき 147

旅のなかの歴史 149

近江の古社 151
京の翠紅館 153
三草越え 155
上州徳川郷 158
土佐の高知で 161

葛飾の野 163
五稜郭百年 166
草創のころの海軍 168
海流が作った町 171
出石の兄弟 173
肥前五島 175
新選組の故郷 178
生きている出雲王朝 181
幻想さそう壁画古墳 192
太平記とその影響 198
京への「七口」合戦譚 207
日本的権力について 213
あたらしい通念 223
軽い国家 225
軽薄へのエネルギー 227
日本語について 230
明治百年 231
歴史を動かすもの 234

白石と松陰の場合 239
吉田松陰 245
大久保利通 250
長井雅楽について 254
維新前後の文章について 256
江戸幕府の体質 258
歴史の不思議さ 260
質屋の美学 262
明治の若者たち 264
粗食 268
濡れた足跡—「討幕の密勅」 270
百年の単位 272
話のくずかご 275
アメリカの剣客 277
春日の大杉 281
千葉の灸 286
普仏戦争 290
村の心中 296

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

策士と暗号 302
ひとりね 309
有馬藤太のこと 313
日本人の名前 319
日本人の顔 323
浪人の旅 328
異風の服飾 332
武士と言葉 337
謀殺 341
どこの馬の骨 346
幻術 350
清沢満之のこと 355
ある情熱 362
軍神・西住戦車長 366
競争原理の世界（談話集） 375
日本史からみた国家 377
組織というもの 390
競争原理を持ちこむな 399

新大阪駅での思案 413
秩序について 415
京の味 417
播州の国 420
ある明治の庶民 422
長髄彦 428
大和竹ノ内 430
高野山の森 431
僻地にいると 433
眼の中の蚊 435
わが小説 439
私の小説作法 440
歴史小説を書くこと 442
一冊の本 444
勇気あることば 445
書き終えて思うこと（あとがき集） 447
「竜馬がゆく」あとがき一 449

「竜馬がゆく」あとがき二 450
「竜馬がゆく」あとがき三 451
「竜馬がゆく」あとがき四 454
「竜馬がゆく」あとがき五 457
「燃えよ剣」あとがき 473
短編集「幕末」あとがき 475
「国盗り物語」作者のことば 476
「国盗り物語」あとがき 477
「峠」あとがき 480
短編集「酔って候」あとがき 482
「最後の将軍」あとがき 483
短編集「鬼謀の人」あとがき 485
「妖怪」を終えて 486
「歳月」あとがき 488
「花神」あとがき 490
短編集「美濃浪人」あとがき 492
短編集「王城の護衛者」跋 493

歴史を紀行する

竜馬と酒と黒潮と〔高知〕

風体野盗に異ならず

ずいぶん土佐と土佐人のことを書いてきたが、われながら妙である。なぜこれほどの関心を持ったのか、この稿を書くにあたって考えてみたが、わからない。

多くの場合、理由をことさらに考え出すということは、物事を鮮明にすることではなく、理由のぶんだけ物事を複雑にするか、その理由のぶんだけうそになりがちなようである。

豊臣時代、大坂城下の町民たちがはじめて土佐武士というものをみた。土佐の長曾我部氏が秀吉に降伏し、大坂へのぼってきたのである。首長の長曾我部元親は屈強の家臣五十人をひきつれ、海路大坂に入った。沿道に見物がひしめいたが、みな、はなしにきく土佐人というものの風体におどろいた。

——その風体、野盗に異ならず。

という。遠い海のそとから蕃族かなんぞがやってきたような異様さをひとびとは感じたであろう。着物はみじか袖で、背中に綿をたっぷり入れ、帯はといえば西畑という木綿のものを胴でぐるぐる巻きにし、一見土竜のごとし、という印象であった。月代はほとんど坊主同然に大きく剃りあげ、帯びている刀は三尺もある長刀ぞろいで、差し添えている脇差ときたら、普通ならば短刀に毛のはえた程度の長さでいいのに、大刀ほどにながい。大刀が折れたときにすかさずこれを抜いて役立たせようとするのであろう。

騎っている馬もまた異様であった。犬かとおもわれるほどにちいさかった。土佐駒とよばれるものであり、当時の日本でも最も矮さな種類の馬で、騎馬戦をすれば馬格の大きなものにくらべて不利にちがいなかったが、しかし山路の騎走には大いに適し、荷駄馬としても屈強であった。長曾我部勢はこの馬をもって四国全土を席巻し、斬り従え、やがて秀吉政権に降った。秀吉は元親に対する引出物として多くの物品をあたえたが、そのなかに鞍置きの葦毛の馬一頭があった。

元親は帰国し、それを家臣たちにみせたところ、かれらは馬の大きさに肝をうばわれ、「これが馬か」と口々にさわぎ、さらにその鞍の美麗さに一驚した。鞍は梨子地のもので、当然ながら黄金色に光っている。なぜこれは光るのか、とかれらにはこの種の漆工芸が理解できなかった。それほど土佐国というのは、日本の共通文化のなかから隔絶されていた。土佐人が、大規模なかたちで日本の共通文化

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.